

2. 戦国期の宇佐下毛地域と城館 — 16 世紀後半を中心に —

1. はじめに

現在の大分県域のうち、宇佐市・宇佐郡（以下、宇佐地域とよぶ）と中津市・下毛郡（以下、下毛地域とよぶ）は旧豊前国に属する。中世城館という視角の下で、文献史料からこの地域を眺めた時、注目すべきものとして天正期の諸史料に頻出する切寄がある。そこで、以下では宇佐・下毛地域の戦国期の概況を素描し、切寄を中心に同地域の城館について若干の検討を加えるものとした。

2. 中世後半の豊前国

豊前国は西瀬戸内海に面し、北は関門海峡を隔てて長門国と、南は豊後国、北西は筑前国と境を接している。宇佐・下毛地域はその南部に位置し、九州きつての荘園領主であった宇佐宮が所在する。同地域のほとんどが、宇佐宮あるいはその神宮寺である弥勒寺の所領で、同地に割拠した土豪は宇佐宮領の名主職などを務め、宇佐宮・弥勒寺と何らかの形で関係を有していた。

こうした宇佐・下毛地域の 15 世紀代以後の状況をみると、支配面では基本的に天文 20（1551）年まで大内氏が守護職を務めている。ただ、周防山口、豊後府内を各々本拠とする大内・大友両氏にはさまれる形にあった豊前国は、両氏の領国支配とその拡大を志向するなかで焦点となる地であった。大内氏と大友氏の対立は、室町幕府將軍家足利氏による跡目相続への介入なども含めて、政治上複雑な様相を呈する。紙幅の点からも、これを詳述することはできないが、豊前国は大内氏と大友氏との対立の中で、たびたび両氏の角逐の場となった。

例えば、永享 3（1431）年には大内持世の死をうけて大友持直は豊前国に侵入しているし、明応 7（1498）年には、大友政親・義豊の内訌の後、家督を継いだ大友親治は宇佐・下毛地域や国東へ軍をすすめ、結果親治は豊前国守護職を手にしたとされる。あるいは、文亀 1（1501）年には、細川政元によって都を追われた足利義尹（義材）を支援する大内義興に対して、政元と結んだ大友親治・義長父子は豊前国京都郡馬ヶ岳に兵をすすめ合戦に及んでいる。この合戦後、大内・大友両氏の間で講和が結ばれるが、天文 1（1532）年に大内義隆が家督を継いだことを機に大内氏包囲網が形成され、先の大内・大友氏の講和も破られた。豊前・筑前で両氏の合戦が起き、天文 3（1534）年には大内氏が豊後国勢場ヶ原（現山香町）まで侵入し合戦となっている。宇佐・下毛地域における城館に関する記録も、この 15 世紀後半から多くなる。

さて、大内氏の支配下では、宇佐郡代佐田氏を中心に宇佐・下毛地域の土豪は大内氏に属した。明応 7 年の合戦では、佐田氏は菩提寺に籠り、宇佐郡院内衆は「執誘妙見尾致在城」（「佐田泰景軍忠状」『大分県の中世城館』第 1 集 160 号、以下『大分県の中世城館』第 1 集・第 2 集の収載史料は、1 - 160 のように巻名 - 史料番号という形で表記する）とあるように、妙見岳城の整備を行い籠城している。あるいは、天文 1 年以後の一連の戦いでは妙見岳城をめぐる合戦もおき、佐田氏ら宇佐・下毛地域の土豪は大内方として参戦し（1 - 202・209 など）、天文期には妙見岳城の修理が佐田氏らの手によってなされている（1 - 305・306・309 など）。妙見岳城（院内町）は大内氏の支配下では豊前国南部の支配拠点であり、大友氏に対抗する「境目の城」であった。その後、天文 20（1551）年に大内氏が滅亡し、大友氏が豊前国を支配するに至ると、佐田氏をはじめ宇佐・下毛地域の土豪は大友氏の支配下に入り、「宇佐郡衆」などと呼ばれた。

さて、大友氏の豊前国支配の特徴は、1 つには荘園領主宇佐宮の存在を否定しようとした点が挙げられる（稲本 1969）。宇佐宮への妙見岳城誘の点役賦課（1 - 348）や神職らの所領の改替など、社奉行奈多鑑基を中心とし強権的ともいえるべき形ですすめられた。こうした動きは、宇佐宮内部を中心に反大友の姿勢を生み出す要因の 1 つとみられる。また、下作職の展開をはじめとする在地構造の変化などによって生じた矛盾を大友氏も止揚することはできなかったことも留意される。永禄 9（1566）年、豊前国麻生（現宇佐市麻生）を本拠とした麻生氏は大友氏によって討たれている（1 - 368・369）が、宇佐・下毛地域において大規模に反大友の動きが顕在化するのは、天正 6（1578）年に大友氏が日向で島津氏に敗北した後のことであった。

3. 田原親貫の乱と「郡内動乱」

天正 6（1578）年、大友氏が日向耳川の合戦で島津氏に敗北すると、「今度秋月并豊筑之者共悪逆之企不及是非候」（1 - 405）とあるように、大友氏の領国支配は動揺をきたした。天正 7 年には田原親宏が叛意をみせ、豊前などでも不穏な状況となった。こうした状況を『大友家文書録』は「守豊前国龍王・妙見城以備不慮有授於上野・恵良・香志田・波多義統書」と伝えているし、下毛郡では「悪党」一すなわち反大友勢力が蜂起している（1 - 416）。そして、同年 12 月には『大友家文書録』に「田原親貫、叛義統、応秋月・龍造寺、拳烽所々、自在豊後国東郷浦辺別構懸懸堡」（1 - 419）とあるように、親宏の養子であった田原親貫も叛乱を起こした。この叛乱は、日向遠征の後に大友宗麟が子供の親家を田原親宏の跡目にしようとしたことに、親貫が反抗したためといわれ

ている。

田原親貫は鞍掛城（豊後高田市）と安岐切寄（安岐町）を主な拠点とし、大友側は妙見岳城に田原紹忍が在城し、ここを拠点とした。宇佐・下毛地域の土豪は「田原近江入道妙見岳在城之儀申付之处、従最前以同城別而辛勞之由悦喜候、毎事紹忍被得指南、弥可勵馳走事」（1-432）という大友義統の言葉に端的に示されるとおり、田原紹忍の指揮下で妙見岳城に在城するなどして親貫と対峙した。しかし、戦いは天正8（1580）年3月には大規模な兵力を投入する（1-450）が、叛乱を鎮圧することができなかった。結局、10月9日鞍掛城は落城するが親貫を討ち取ることはできず（1-568）、親貫は豊前善光寺で討ち取られたともいわれる（1-565）。

この田原親貫の叛乱については注目すべき点がある。それは、田原親貫などの叛乱の背後に広汎な反大友勢力－史料上「悪党」・「悪徒」と表現される－の存在を看取できる点である。前述したとおり、天正7年には下毛郡での「悪党」の蜂起がみられるが、親貫の叛乱の折も「豊前表悪徒等為鞍懸加勢取出之候处」（1-542）などであり、大友氏は親貫だけでなく反大友勢力とも対峙せねばならなかったのである。この時期、宇佐下毛地域の各地で「悪徒」と大友方の土豪による合戦が起きている（1-436・468・534など）。こうした「豊前表悪徒」の具体的な構成は判然としないが、天正8（1580）年4月に佐田弾正忠に宛てられた大友義統の書状には「宮成右衛門尉・益永民部少輔・時枝備後守・橋津佐渡入道」が狼藉の振る舞いをなしたとある（1-483）。ここに挙げられた者のうち、宮成氏は宇佐宮大宮司職、益永氏は宇佐宮政所検校職、時枝氏は弥勒寺寺務職、橋津氏は宇佐宮領の根本所領の1つである封戸郷の郷司職などを務めている。いずれも宇佐宮内部の者というべき存在で、宇佐宮に属する神職らが宇佐・下毛地域における反大友勢力の中核をなしていたことが窺える。この他、下毛郡の野中氏も反大友の動きをみせており（1-532）、さらには城井氏や長野氏といった豊前国上毛郡域の土豪らも侵入し（1-534）、各地で戦いが引き起こされた。

このような在地の状況について、田原紹忍は天正8年閏3月10日付の書状で「今度郡内動乱」と述べている（1-474）。この紹忍の言葉に端的に表現されるように、田原親貫の叛乱は宇佐・下毛地域などの反大友勢力と大友氏との戦いであり、宇佐・下毛地域全体を戦乱の場とするものであった。一連の戦いの中で、たびたび大友宗麟・義統父子は宇佐郡衆の中心にあった佐田氏に書状を送っているが、そこでは「此節郡衆中（宇佐郡衆中－引用者注）被申談可勵忠貞事」（1-439）などとあるように、その支配が不安定となった宇佐郡での勢力維持と叛乱鎮圧のため宇佐郡衆の大友氏への忠節を求めたのである。

ところで、田原親貫の叛乱は鞍掛城などの落城によって一応の終息をみているが、これによって宇佐・下毛地域の在地の動乱状態が終わりを告げたわけではなかった。天正9年には再び時枝氏らによる蜂起がみられ、「宇佐郡合戦」（1-625）が起きている。田原紹忍は「里郷再乱之儀」（1-621）と述べ、同年11月には大友氏は宇佐宮の焼き討ちを行っている。その後も、天正10年には「時枝表」（宇佐市時枝）で合戦が行われている（1-647～653）し、宇佐宮大宮司家の1つ安心院氏が神楽岳要害に籠り反乱を起こしている。さらに、翌天正11年には大友氏が「豊前国発向」を行い、時枝氏や「西部逆徒」と合戦している（1-700など）。このような宇佐・下毛地域での争いは、基本的に天正15年の黒田氏の中津入部まで続くこととなる。

天正年間の一連の動乱は、従前の戦いとは異なりはるかに長期にわたって在地を巻き込むこととなった。そして、こうした状況は、例えば、反大友勢力の急先鋒であった時枝氏の本拠（現宇佐市時枝）は、大友方の土豪中嶋氏の拠点（現宇佐市高家）と2kmほどしか離れていないように、近接する土豪同士が敵味方に分かれるという状況を生み出したのである。宇佐・下毛地域の土豪にとっては、緊張状態が継続したともいえよう。

4. 切寄について

（1）これまでの研究

さて、こうした天正年間の動乱に関わる一連の諸史料に頻出するのが切寄なる言葉である。

この切寄については、阿蘇品保夫氏（阿蘇品1981）・乙咩政己氏（乙咩1986）・吉本明弘氏（吉本2003）の研究がある。ここで従前の研究を振り返っておくと、まず諸氏が一致して認められていることは3点ある。1つは切寄は史料上天正7年から15年に登場し、それは基本的に大友氏およびその家臣団発給の史料にみられるという点である。もう1つは、切寄が宇佐・下毛郡と豊後国東郡に多く認められる点である。ただ、この点をめぐっては、阿蘇品氏が「大友氏の下で豊前国の支配を担った田原紹忍の支配地に分布するとされたが、切寄は豊後国南部や筑前などにも分布したことが乙咩・吉本両氏によって明らかとなっている。3点目としては、切寄は城館の一種とする点である。」

次に、諸氏で見解が異なる点についてみていくことにしよう。切寄に初めて着目された阿蘇品氏は、以下のよう

①切寄の機能の1つに在地の連絡、補給路の維持が期待された。また、地域で反乱が発生した時には周辺の戦力を結集して対処する拠点の役割を果たし、日常的な郡内防衛の拠点であった。

②切寄は豊前国を統括した大友家臣団の田原紹忍が領域内の反乱抑止・外的奇襲に対処するため、本来本領志向の強い在地領主たちの希望を利用する形で生まれたものと考えられる。田原紹忍が拠点とした妙見岳城と切寄は本城と支城的関係にあり、領域内の軍事的分担を行った。

乙咩氏は主として阿蘇品氏の論点の②を取り上げられ、次のような見解を示された。

①切寄は田原紹忍の支配地域以外にも分布することから、広義に解すると切寄は大友氏によって命名された在地領主の城郭である。

②田川郡・築城郡にも切寄は所在したとみられるが、この地域は天正7年以後反大友勢力の拠点である。こうした地に切寄があること、また高家切寄は永和2(1376)年にみられる高家城を前身とするものであろうことから、大友氏が豊前国を安定的に支配した時点において従前存在した城郭を切寄と呼称した。

さらに、こうした両氏の研究をふまえて、吉本氏は切寄を大友氏の領国支配との関わりから取り上げられた。次ぎのような見解を示された。

①切寄は、史料上では天正7年以降の動乱期に在地領主の既存の城あるいは新たに構築した城を大友氏が公の城として認定したものに使用された。

②大友氏による叛乱鎮圧への対処として、豊前国では妙見岳城を支配拠点とし、切寄には他の在地領主が籠もるような地域の防衛拠点として意味をもつものもあった。大友氏の領国支配においては、こうした拠点としての切寄を他の切寄で周辺を固めるという境目地域における城郭編成をとった。

③切寄の語義は、切寄の間で在地領主を移動させるような軍事編成をとった。こうした在地領主を分断し寄せ集めることから「切寄」という語が生まれたといえる。

④島津氏領国での「拵」との比較から、切寄や拵などの城館に付随する地域独特の城や城的なものを示す用語は、戦国大名の領国支配の中で、動乱期における境目地域への強化策として編成されたものに使用された。

以下では、このような一連の研究をふまえて、主として切寄の規模や構造および構築主体という側面から、改めて切寄の特徴を同時代の史料を中心に検討していきたい。

(2) 切寄の特徴

(ア) 切寄の規模と構造

史料上、切寄の規模や構造についてはなお明確でない。その中で、注目される記述としては大友宗麟から佐田鎮西綱への書状(1-543)の一節の「赤尾三河入道宅所江取懸、村中令放火、於切寄雖詰寄候」(1-543)が挙げられる。ここでいう赤尾氏は現在の宇佐市赤尾を本拠とした土豪であるが、上の記述から切寄が赤尾氏の宅所という日常の施設と別に構築されたことを確認することができる。従来、この赤尾氏の切寄は光岡城(宇佐市赤尾)に比定されている。光岡城は標高約140mの丘陵上に位置し、尾根に沿って南北85m、東西35mの長方形の郭があり、周囲に濠がめぐることが確認されている。ただ、遺構の年代は不詳であり、上でいう赤尾氏の切寄が光岡城にあたることは断言し難いが、いずれにせよ切寄は土豪の宅所とは別に築かれる場合があったことをまず抑えておきたい。

次に注目されるものとしては、宇佐市四日市に所在した四日市切寄に関わる一連の史料である。同切寄は、天正8年のものとみられる諸史料に四日市切寄渡辺寄合中(1-526・539)あるいは渡辺石見守・市左衛門尉・三郎右衛門尉・兵部丞・縫殿助・沓岐守・其外切寄衆中(1-590)という文言があり、渡辺氏一統を中心とする集団によって維持されたことがわかる。また、天正12(1584)年の大友義統の書状には「当切寄商売人方々往返之刻」(1-729)とあり、四日市切寄には商売人が住したことも窺える。

この四日市切寄については、天正8年8月の発給とみられる大友義統の書状には「最前以来寄合中切寄取誘」(1-526)とあり、四日市切寄は天正8年に近い時期に築造されたことが窺えるし、前述したように四日市切寄には商売人も在したこともふまえると、その比定地は現在の四日市中心部にあたる平地部とみられる。同切寄の構造などは判然としないものの、渡辺氏を中心とした集団によって構築維持されたことから、宅所を含む一定のエリアを囲い込むものであったと考えられる。

以上の点をまとめておくと、切寄には赤尾氏の切寄のように土豪の宅所とは別に構築されるものと四日市切寄に示されるように一定のエリアを囲い込むような、惣構というべきものの2つのタイプが存在したことを史料から想定することができる。ただ残念ながら、諸史料にみられる様々な切寄について、後述する安岐切寄を除けば埋蔵文化財調査もほとんど、「賀来安芸守切寄」と「築地村切寄」というように、人名を冠するものと地名を冠するものという分類もできるが、その差違がどこにあるのかなどは詳らかでない。

(イ) 構築主体

次に構築主体についてであるが、切寄に関する諸史料をみると、前述した四日市切寄は渡辺寄合中が「取誘」

たものであり（1－526）、田原親家が賀来安芸守に「切寄取誘、堅固相支」と述べている（1－423）ことなどから、切寄は在地土豪によって築かれたものであることが確認できる。ただここで重要なことは、切寄という言葉は大友方・反大友方を問わず使用されていることである。例えば田原親貫方の拠点の1つは「安岐切寄」（1－512など）と呼ばれたし、反大友方であった時枝氏の拠点は「時枝切寄」と記されている（1－589など）。このことは、本来切寄という言葉が在地土豪によって築かれた城館を称するものであり、それは大友方の土豪に限定するものでないことを示しているだろう。すると、吉本氏がいわれるように切寄を大友氏の防御拠点と位置付けるのみでは理解できない面が生まれるし、氏がいう切寄の語義もお検討を要するであろう。

天正7年以降の動乱期に諸史料に登場する切寄については、「武蔵要害并福寿院切寄」（1－593）などと同時代の史料では「～城」と書き分けられ、「～城」と称された城館とは異質のものと認識されていたことを確認できる。あるいは、「今度西表之悪党令現形候之处、其方事切寄取誘」（1－534）という表現に示されるように、切寄は動乱状態をうけて在地においてきわめて短期間に築かれたものといえる。これらをふまえると、切寄は例えば妙見岳城を典型とする、「～城」として表現されたものと異なり、大規模で計画的な工事を伴う城館でなく、動乱の中で土豪によって急造されたものともいえる。このような切寄の構築については、宇佐・下毛地域の支配を担った田原紹忍の指示があったことも想定されるが、大友氏権力が関与するものではなかったとみられる。大友方の土豪が築いた宇佐・下毛地域の切寄は、大友氏にとっては同地域の支配維持と動乱抑止において田原紹忍が在する妙見岳城と「本城－支城」という関係が結ばれ、防衛拠点として領国支配の中に位置付けられたといえる。そうした切寄の中には、吉本氏が指摘された四日市切寄は検使の派遣（1－433）などを通じて、地域の中核とされたものも認められる。

切寄の構築という点に関しては、吉本氏が指摘されているが、新たに構築する場合と既存の施設の再整備や改変という2つの場合を想定できる。前者の例としては、史料上なお判然としないが、諸史料に「取誘」と記されたものを挙げるのが可能である。一方、後者の例としては安岐切寄が注目される。同切寄は諸史料にみられる切寄の中で唯一発掘調査がなされたものであるが、その調査所見によると、遺構は3期に分類され、第3期にあたる文禄期の熊谷氏による大規模改造以前の遺構は居館というべき特徴を備え、その画期は16世紀後半から末期に画期があるとされる。この第1・第2期の遺構は連続性をもち、第2期では土塁や薬研堀が築かれ、従前の施設の防備強化がなされたという（玉永・小林1988）。こうした所見は、動乱状態をうけて既存の施設を再整備した切寄の一例を伝えると同時に、切寄と呼ばれるものの構築が大規模かつ計画的な工事を伴うものでないことを示唆しているのではなかろうか。

ちなみに、史料上切寄は豊後国の南部でも検出できる。その初見は天正12（1584）年の志賀道輝による宇目（豊後海部郡）の諸切寄の点検を伝える史料（1－731）である。これは「薩摩衆も気をゆるしかたく」という緊張状況をうけてのことであった。また、『豊後国古城蹟并海陸路程』（1－記録部二－2）に記された豊後国の大野・直入郡などの諸切寄は天正14年の島津氏の侵入ルートに位置している。これまでみてきた切寄の特徴をふまえると、これらは対島津氏との緊張状態あるいは動乱の中で在地の土豪などが構築したことが窺える。宇佐・下毛地域に遅れて豊後国南部で切寄が登場することは、同地における動乱状況が天正12年以後に現出したことと無縁ではないのである。

（ウ）小 括

これまで述べてきたことをまとめておくと、切寄として表現された城郭は、天正7年以降に創出された動乱状態をうけて、在地の土豪が新たに構築あるいは既存の城郭を再整備したものを大友氏が呼称したものである。大友方の土豪が築いた切寄は、大友氏の領国支配のなかで防衛拠点として編成されたのである。

さて、このような切寄を中世城館と我々が把握するものの中で位置付けるならば、それは千田嘉博氏が示された小規模城館にあたるのがまず指摘できよう（千田1991）。前述したとおり、切寄には宅所と別に構築されたものと惣構というべきものの2種が存在するとみられるが、このようにみると切寄という言葉は単一の用例を持つ言葉と規定できないことも窺える。ただ、諸史料にみえる切寄はその構造を明瞭に確認できる事例がほとんどないこともあって、土豪の存在形態や在地構造とどのようにリンクするのか明らかでない。

ここで改めて大友氏の領国支配との関わりから切寄を捉え直すと、その構築は「城誘」として表現された大友氏が直接関与する、体系的な城郭整備に基づくものでないことがまず指摘できよう。既に、大友氏の領国支配をめぐる有力家臣を「方分」として一定のエリアを統括させたこと、大友氏が新たに自己の領域とした地では、在地に存在する土豪らの相互扶助の論理で問題解決を図ろうとしたことが指摘されている（藤木1969・三重野2000）。このように大友氏の領国支配は、そのすべてで大友氏が主従制的ヒエラルキーによる一元的支配（三重野2000）を貫徹させたわけではなく、特に新たに支配地としたエリアで在地における緊急性・危険性を伴った状況下では各地域にその解決を委ねる部分があったといえる。動乱状況の中で在地土豪によって構築された切寄が、基本的

に宇佐・下毛地域をはじめとする大友氏の本領でない周縁部に分布していることは、こうした大友氏の領国支配の在り方を端的に示すものといえるだろう。

5. おわりに

天正15年、豊臣秀吉の「九州仕置」の後、黒田氏は中津に入部した。それに先だって、豊前国の城破と境目の城の維持が命じられている（1－839）。この時点まで残存した切寄などの破却はこの段階で行われたとみられる。その中で黒田氏によって、山国川河口に新たな城郭－中津城－が築造された。これは山国川の治水を前提とするものであり、こうした海岸近くに立地する城郭は、九州でも嚆矢となるもので注目すべき城郭といえる。一方で、妙見岳城と龍王城は大友氏の下に残されている（1－840・841）が、その理由は詳らかになし得ない。

さらにその後、いわゆる「一国一城令」によって宇佐・下毛地域では中津城を除いて城郭は破却されたが、切寄は地域の「歴史の記憶」に留められた。本来の意味は忘れ去られようとしながらも、例えば17世紀初頭の成立とみられる『豊州城堡記』（2－補遺15）は「～城」と「～切寄」を書き分けているし、正保期に成立した『豊後国古城蹟并海陸路程』でも切寄の言葉がみられ、豊後国南部でもなお記憶された言葉であったことがわかる。だが、時代を下るにつれ城郭であったという点でもって、切寄の言葉自体が忘れ去られ「～城」などという言葉で統一されたのである。（櫻井成昭）

註

- （1）「田原親家感状案」（1－669）で、親家が尾長居切寄（現宇佐市尾永井）に籠もった津崎兵庫助に対し「至切寄悪党等取懸之刻、城内各一段粉骨之故、敵即時引退之由」と述べたように、切寄と城内という言葉が併せて使用されており、切寄は城館の1種として認識されたことがわかる。
- （2）四日市切寄については、従来享保10（1725）年の年紀を有する『四日市村年代記』序文に、黒田氏入部とともに渡辺氏は「狐塚山の切寄を転して、村土井に引籠、荒野一町余開発前後に堀を構、石垣を築上、（中略）一村に三屋敷を開き、四至の界を極め」とあり、狐塚山は宇佐市四日市の小倉池の北側にあることから、現在の四日市中心部の南西にある丘陵部とされている17世紀初頭の成立とみられる『豊州城堡記』に記述がある。これによると、明徳年中に渡辺氏は狐塚山に一城を構え、「下邑二土井ヲ営」み、弘治年間以後渡辺一族は繁昌し和泉守・筑後守・三郎右衛門尉の兄弟は「各切寄土井ヲ構」とあることから、天正期の諸史料にみられる四日市切寄は現在の四日市中心部に立地したと推察される。
- （3）宇佐市大字宮熊は、土豪萩原氏の拠点である。現在、この地は集落を囲う土塁が確認でき、集落内に城という小字がある。ただ、この地が切寄と称されたかは史料上詳らかでないために即断はできないが、ここに四日市切寄のように土豪の本拠たる集落などを囲う切寄の1タイプをみることができよう。

<参考文献>

阿蘇品保夫「切寄考」（『石人』257・260・261号 1981年）

稲本紀昭「戦国的権力編成の成立－豊前国の場合－」（『日本史研究』108号 1969年、のちに『九州大名の研究』戦国大名研究論集7 吉川弘文館 1983年に再収）。

乙咩政己「中世末期から近世初頭にかけての城郭について」（『大分県地方史』122 1986年）

千田嘉博「村の城館をめぐる五つのモデル」（『年報中世史研究』16 1991年）

玉永光洋・小林昭彦『安岐城跡・下原古墳』（大分県教育委員会 1988年）。

藤木久志「室町・戦国期における在地法の一形態」（『聖心女子大学論叢』31・32合併号 1969年、のちに同氏著『戦国社会史論』東京大学出版会 1974年に所収）。

三重野誠「戦国期大友氏と方角衆・方角之儀」（『相剋の中世』東京堂 2000年、のちに同氏著『大名領国の支配構造』校倉書房 2003年に所収）。

吉本明弘「中世城館から見る大友氏の領国支配－「切寄」を事例として－」（『大分県地方史』189号 2003年）